

高島藤樹会

(題字は、竹脇彌卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156

藤樹賞の表彰

会長 川越 清司

藤樹賞を、松本孝太郎氏と萬木甚一良氏両名の方に授与する事に決まりました。

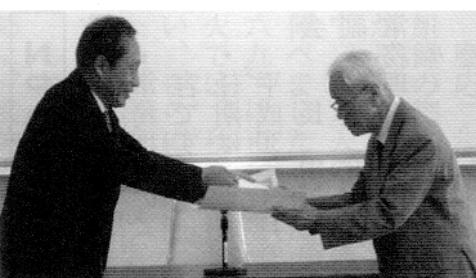
6月の総会終了後に藤樹賞の贈呈式を行いました。松本先生は体調を崩され残念ながら欠席されました。萬木先生も体調万全でないなかを出席していただきました。

新しい組織になり初めての藤樹賞です。前回は平成22年に久保田暁一先生が受賞されておられます。

藤樹賞の趣旨は、先生の教えを普及し顕彰された団体・個人に与えられるとうたわれています。

数年前より理事会に於いて話し合いましたが、余りにも範囲が広く選考の難しさに直面していましたところ、理事より「灯台もと暗し、我等のすぐ近くにおられるのではないか」と発言があり、松本先生・萬木先生の両名を挙げられました。多胡表彰委員長が正式に議題に上げ理事全員の賛同を得て決定した次第です。ここに報告を致します。

松本先生におかれましては、昭和22年朽木東小学校に赴任、爾来39年間に及ぶ教職人生、藤樹記念館設立準備室室長、その後同初代館長に就任され藤波幼稚園園長・理事長に就任。現在は清水安三先生ゆかりの桜美林大学孔子学院高島学堂名誉学長



藤樹賞授与

式には、肃々と式次第に沿つて進んでいましたが、萬木先生に賞状を渡す場面になつた時に、はからずも胸が詰まつて声が出ませんでした。60

次代の藤樹賞を目指して、先生の教えである五事を正す 貌、言、視、聴、思、心をこめてやさしく、思いやりのある言葉で、温かいまなざしで、よく聞いて、まごころをこめて相手の事を思うこと。日々の生活に活かしたいものです。今後は藤樹先生がしげられたと言われている論語と王陽明、そのうちの論語を初心者の方を対象に素読より学んで、藤樹会の運営の一部になればと思つて

を務められておられます。藤樹先生一筋の研究の中、又父君である松本義懿先生の書きとどめられた文章を整理し、広く我々に知らしめされています。余談ではありますが、義懿先生の残された県立藤樹女学校・安曇川中学校創立記念式辞やその他多くの原稿は墨で推敲の跡が窺えるもので、藤樹先生の研究を目指すものにとつては第1級の資料と思します。

又、萬木先生におかれましては、滋賀師範学校を卒業後教職に就かれ、滋賀県教育委員会を経て、青柳小学校校長を退職後、藤樹記念館長を務められました。その間に「教育功労賞」（文部大臣表彰）を受けられていられます。教員時代には藤樹先生の教えをわかりやすく、子供たちや回りの先生方にも細かく伝えて来られました。私も青柳小学校時代に教えを受けた一人です。

記念品は多胡委員長の英断で、それぞれのお顔の写真をクリスタルガラスにレーザー光線を利用して、致良知を表現するという現在の技術を駆使して仕上げていただきました。藤樹先生もえらい時代が変わったものだと称賛されていることと思います。

式後は萬木先生のお話を聞かせていただきました。県教育委員会学校教育課の在任中に於ける様子を、涙あり笑いあり、いつもと違う先生の切り口でお話を聞かせて頂き、最後に日々の生活において常に心の物差しに「慎独」の言葉を胸に留める事を話され、終了致しました。

六月二十六日、安曇川公民館において、総会並びに藤樹賞授与式・記念講話を、百五十八名（出席三百五十八名）の参加を得て開催されました。その後、ウエストレイクホテル可以登樓で懇親会がもたれました。

●平成二十八年度 総会

川越清司会長の挨拶の後、高橋志郎さんが議長に選出され、議事に入りました。はじめに平成二十七年度の事業報告と決算関係並びに監査報告があり、承認されました。

次の役員選任に関する件について、後述のとおり決定されました。

続いて、報告事項である平成二十八年度事業計画及び予算が報告されました。

●藤樹賞授与式

総会に引き続いて、藤樹賞授与式が執り行われました。本会報の巻頭文で川越会長が紹介されました。ようやく、今回よりは、松本孝太郎先生と、萬

木甚一良先生が授賞されました。

授与式終了

役員は次の通りです。（敬称略）

・常務理事の（）内は、担当内容です。

・任期は、平成28年6月26日（平成30年3月31日）です。

萬木甚一良先生
頭文や「ひじりの声」を参考ください。



今年の主な活動予定

●藤樹先生映画会・映画制作に関する講演会（三月・安曇川）

●藤樹賞の選考と表彰

●講演・講話・指導活動（随時）

●論語素読教室（随時）

●教材の研究・開発

●紙芝居による啓発推進

●藤樹像制作に向けた調査

●藤樹人間学塾（毎月第一土曜日）

●藤樹さんに親しむ会（毎月第一日曜日）

●会報『高島藤樹会』の発行（年三回）

●「高島藤樹会」のホームページ更新（新規）

●小学校立志祭に啓発品贈呈（「五事を正す」クリアーホルダ）

●「中江藤樹DVD」等の販売
大洲祭りで高島市物産の販売



平成28年度総会の様子

NPO法人高島藤樹会役員一覧

上田藤市郎

ひじりの声

藤樹先生は、独学で中国の書物を読み、人の生き方について様々な言葉を提示された。「貌言視聴思」「致良知」「知行合一」「自反慎独」など、いずれも数個の漢字で深い内容が表現されていて、一見して意味がわかるものではない。解説書や研究者の著作の解釈も様々で、結局は自ら勉強し続けるしかないのかもしれない。

過日、我ながら、納得できる講話を聞く機会を得た。今回、「藤樹賞」を受賞された萬木甚一良先生は、記念講話の中で、藤樹先生の「自反慎独」という語について、「自反」とは、我々は、物事がうまくいかないときの原因を自分の外に求めたがるものだが、そうしないで自らに原因があるのではないかと、自らに問い合わせることであり、また「慎独」とは、そのようなときに自分の心にわき起こつて来る怒りや恨みの感情を一切外に出さずに慎むことではないかと話された。

九月の儒式祭典で朗誦される「藤樹規」の「己の欲せざる所」人に施すこと勿れ、行いて得ざること有らば、反りて諸を「己」に求めよ」と同じ心がけである。

監理	北川暢子・小多倍裕
副会長	川越清司
常務理事	高橋志郎（心のセミナー）
会長	北川暢子・小多倍裕
田中清行（事務局長・學習）	足立清勝（教材）
多胡賢（表彰）	高橋志郎（心のセミナー）
飯田典子・桑原務	足立清勝（教材）
清水鉄次・高谷美智子	田中清行（事務局長・學習）
武田基裕・深川澄雄	多胡賢（表彰）
橋本悟史・徳丸和枝	高橋志郎（心のセミナー）
保木隆・三田村弘子	足立清勝（教材）
山本義雄・横井正	田中清行（事務局長・學習）
鎌田一彦・古谷芳實	多胡賢（表彰）
(M・H)	高橋志郎（心のセミナー）

藤樹人間学塾：
藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考え方を深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月第一土曜日の午後、開催しています。

本会報ではその模様をお伝えいたします。

五月七日（土）午後、第57回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

はじめに円覚寺管長の横田南陵著『二度とない人生

だから今日一日は笑顔でいよう』の中に「親の恩とは何か／念すれば花ひらく」という章があり、内容は藤樹先生の「孝」の教えと同じであると話しました。

『孝經』を素読した後、「先王至徳要道あつてもつて天下を順にす：」の項を

学びました。その概意は、先の優れた王は、大事な道を守り優れた徳を持っていたので、国が治まつた。フリートーキングでは、孝と徳の関係等について議論しました。

六月十八日（土）午後、第58回人

間学塾を安曇川公民館で行いました。

最初に『孝經』を素読した後、

「身体髪膚はこれを父母に受けたり。

敢えて損ない傷らざるは孝の始めなり。身を立て、道を行い、名を後世に揚げて、もつて父母を顕わすは孝の終わりなり。」の項を学びました。

その概意は、父母の分身である

この身を正しく振舞うことにより、

実をあげ、名も後世にあがつて、自

然に父母をも顕彰することに至る。」

フリートーキングでは、親の不祥事

で子供がいじめられた時どう対応す

るか、等について議論しました。

塾の後は、場所を替えて懇親会を

楽しみました。

七月二日（土）午後、第59回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

はじめに、今、書店で百三十万部を超えて売れている『嫌われる勇気』（アドラー心理学・哲人と青年の対話）の第1話「トラウマを否定せよ」を説明し、アドラー心理学は仏教の「因果の間に縁がある」の思想にも近く、藤樹先生の「独りを慎む」教えに通じていると話しました。

『孝經』を素読した後、「親を愛す」

する者は敢えて人を侮らず。愛敬親に事うるに尽きて。」の項を学びま

した。その概意は、親を愛せるものは他者も愛せる。親を人として遇せ

ることができるのと同様です。

も同様である。眞に親を愛敬することができるならば、孝道徳を国内外に広めていくことができる。」。フリートーキングでは、こういう自利と利他の心のバランスをどうとつていけばよいのか、等について議論しました。

八月六日（土）午後、第60回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

最初に前月話題になつた「自利と利他」について、最澄の言葉やガンジーの言葉から「利他即自利」すな

わち他の利益を考え行動すること

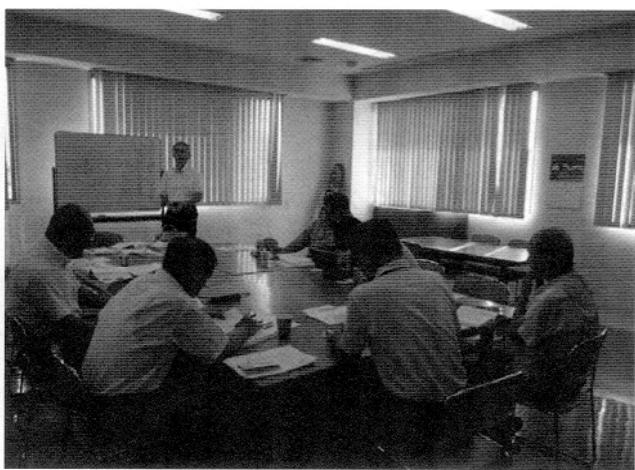
と話しました。他人に「五事を正す」行動により、自分が「良知に致する」ことができるのと同じです。

本塾には、新しく参加される方が徐々に増えています。「学ぶは樂し」。皆さまのご参加をお待ちしています。

『孝經』を素読した後、「上にありて驕らざれば、高くとも危うからず。節を制し度を慎めば満つるとも溢れず。」の項を学びました。その概意は、地位が上であつても驕ることをしなければ高い地位にあつても安定する。富裕であつても財政をきちんと切り盛りし、分度を心得ていればその富裕を長く保てる。」。フリートーキングでは、富裕を保つためには富を分配すべきか、現代の貧困問題・格差社会をどう考えるか等について議論しました……。

本塾には、新しく参加される方

が徐々に増えています。「学ぶは樂し」。皆さまのご参加をお待ちして



藤樹人間学塾 平成28年度予定

○九月三日（土）	十月一日（土）	十一月五日（土）	十二月三日（土）	一月十四日（土）	二月四日（土）	○三月四日（土）
● 時間 十五時～十七時	● 場所 安曇川公民館	● 印は塾終了後、懇親会あり				

久保田暁一先生の生き方

上田 藤市郎

久保田暁一先生を追悼して

先生は何といつても「だるま通信」の人である。「だるま通信」は先生の生命の気管支（機関紙）であった。ここを通して先生は、自分の哲学、人生の智慧、キリスト者としての他者への愛、文學への志を発信し、長年に亘って数限りない読者から、惜しみない敬意と激励、感謝の気持ちを受け取つておられたのである。先生の生涯は、教育と文學に彩られてゐるが、「この二つのものの基盤は、人とのつながり、絆にこそある。」といふのが、先生の信念であり、「だるま通信」そのものであつた。だから、先生はだれに対しても謙虚であり、にこやかに、静かではあるが、熱心に人の話を傾聴された。「貌言視聽思」の実践家であつた。

先生のお宅を訪れたとき、万巻の書物に囲まれた土蔵の雰囲気をもつ書斎で、「ここで執筆しているんだ。」と語られた。あの自信に満ちた至福の笑顔は、「自分の人生は、どこまでいっても文學にあるのだ。」という確信に満ちていた。先

生の処女作「青春の探求」は、先生の人生「文學の探求」につながつてゐる。書棚から、先生は敬愛する作家の書物を引き出して見せてください、普段、訥弁であった先生の口からは、流れるように、「椎名麟三は、三浦綾子は、遠藤周作は、アルベル・カミュは、こうこうだ。」と話は尽きることがなかつた。これらの作家の作品の底を流れるものは、先生の著作の原点である「存在理由」、「生きることの意味」である。先生は、常に上から目線ではなく、「人」に自慢できるものは何も持つていなければ、しかし、人として最低限、これだけの力はだれでも持つて大軽なのだ。」という考え方であつたように思われる。だからこそ、藤樹先生の生き方を「だるま通信」の紙上でいつも讀えておられた。その根底は、「人はだれでも悩みや苦しみがあるし、不幸に陥ることもある。それは避けられないことだ。しかし、それを真正面から真摯に見つめて勇氣をもつて生きていかなければならぬ。」というものであつた。そして、先生の作品は、郷土高島に發するものばかりであつた。

先生自身、晩年持病に苦しんでおられたが、常に私たちに勇気をくれた。また、先生の作品は、郷土高島に發す

久保田暁一先生を偲んで

川越 清司

久保田先生とはじめてお会いしたのは今より50年前のことです。その場所は県立高島高等学校でした。一度も授業を受けたことはなかつたけれど、大変厳しい先生でした。私が事故を起こした時には即退学の処分を提案されたと後で聞きました。ところが何かの縁があり首がつながつていました。私の高校時代はあまり感心した生活を過ごしていませんでした。

ところが時代を経るに従つて、当

時より30年を経た後、神のご加護のもと再会を許されました。今度は、久保田先生は、何を勘違いされたかわかりませんが「川越くん、川越くん」とお声をかけて頂き、西びわこ藤樹木鶏クラブの創立時には身に余る仕事を戴き、なお一層のお力を添えていただきました。木鶏クラブの例会時には、致知をはじめ一語千鈞（森信三著）を説明くださり、藤樹先生の事を学習する先鞭をつけただけでしたが、自分自身学ぶことを教えていただきました。久保田先生は、そんな私にも喜んで調子を合わせてくださいました。安らかにお休み下さい。

送つて頂き葉書で礼状を書きましたところ、次回のだるま通信にて紹介をしていただきました。

そして読書会が発足した時、不由な体を物ともせずの心意気には、回りの会員達は傍観する事は出来ませんでした。学ぶことの貪欲さには心打たれます。

又、3年前に高島藤樹会の会長に就任させていただいた時には我が事のように喜んで頂き、その御蔭で現在も務めさせていただいております。何の縁で久保田先生が私をかわいがつていただいたのかは未だ不明です。

久保田先生が6月にお亡くなりになられた時には、往年のお付き合いの広さを感じさせられる多くの方のお見送りがありました。私も久保田先生の様な生き様を過ごしたいものですが、そのためには一層の学びが必要です。老いて学べば死して朽ちず、命尽くるまでの学びの大切さを教えていただきたい事に感謝申し上げます。久保田先生、本当にありがとうございました。安らかにお休み下さい。





在りし日の久保田暁一先生

久保田暁一先生をしのぶ

多胡
賢

久保田先生との出会いは、月刊誌「致知」読書会―木鶴クラブの会長となられてからとなる。わずか十二年前後の短い期間しかお教えないただく時がなかつたことが残念でした

それまで先生のことは元高校の先生であつたということしか私の予備知識はなかつた。ところが月一回の木鶲クラブでの会合で、折に触れお話しされることをお聞きするたびに新鮮な感情を抱くようになつた。それは先生が文筆活動をされていることを知ることによるものと氣付いた私自身が幼いころ、小説家に憧れていたせいもあるのだが・・・。

小説【小野組物語】【波濤】、
「近江の湖畔に在りて」（隨想と歴
史探訪）、またそこから【湖笛】
【湖北の女】水上勉作品を親しむこ

又、交友のあつた森信三の「修身教授禄」に学び一般社団法人「実践人の家」に加入、夏期講習会に参加するようになつた。私自身市の教育委員を務めていた時期でもあり大いに資するところがあつたと感慨深い、これも先生のおかげです。

『私は教師として生かされてきたのである。私が本を出したり、私なりに文化活動をしたりするに至つているのも、教職にあつて「いかに生くべきか」を考え、求める機会に恵まれてきたからである』と回想されている。家庭の事情で二十八歳の時生涯を郷里高島の地に埋めようと決意、藤樹先生を師の一人として仰ぎ学びながら、隣人の力になれる働きができるよう志向していこう、妻とともに力を合わせて精いっぱい生きていこうと心に刻まれたと聞く。

お体に不自由を感じられ、実践人の家夏期研修会に三回、京都実践人の講習会に二回、先生夫妻と同行できたことが懐かしく思い出される。尊敬する夫妻と狭い車内で同じ空気を吸っている、至福の時であつた。

『私は教師として生かされてきたのである。私が本を出したり、私なりに文化活動をしたりするに至つているのも、教職にあつて「いかに生

教員として生徒と一緒に活動する「人の家」に加入、夏期講習会に参加するようになつた。私自身市の教育委員を務めていた時期でもあり大きいに資するところがあつたと感慨深いこれも先生のおかげです。

『湖畔の声』は、先生がライフワークとされているキリスト教文学者の三浦綾子、遠藤周作、椎名麟三が主に連載されています。ご自宅に伺うと、必ずこの『湖畔の声』の読後感想を求められ、木鶲クラブの資料をお渡しすると「○○さんも頑張ってるなあ」と、先ず褒めて下さるのが常でした。

で開催されましたが木鶴クラブの発足も先生の発案によるものだつたと先生を囲んでのつどいは、家族の団らんそのものの光景でした。お身体も言葉も少しずつ不自由になりながらも、尽きることのないエネルギー・シユな向上心に、道友たちの敬慕なまなざしを何度も目にしたことでしよう。

特に、近藤重蔵の取材旅行の話や三浦綾子氏との往復書簡の話も懐かしく語られましたが、キリスト文学にとどまらず、「悪人正機説」や、中部女子短大紀要に発表された倉田百三論も語り合えたことは、至福の時間でもありました。

平成二十四年四月から高島藤樹会の研修委員会で『翁問答』を学びま

京都で文芸作家の会があつた折
は、会場で車椅子が用意されてて嫌
だつた、と話され、本当にぎりぎり
まで自力で歩くことを望まれました
ですから外出時はいつも奥様の付き
添いで移動されました。ご自分で
「1・2!、1・2!」と声に出し
ながら足を運んでおられた姿が印象
に残っています。

平成二十四年四月から高島藤樹会の研修委員会で『翁問答』を学びます、とお伝えすると、自分も参加したいとおっしゃって、毎月ご一緒に学習会ではござ自分の書き込みされた藤樹ノートを持参され、話し足りないところを「だるま通信」でまとめられ、次の学習会に皆で再読することもありました。

ながら足を運んでおられた姿が印象に残っています。

「実践人」の新理事長に滋賀県の広瀬童心先生が就任されると、高島市で実践人の読書会を是非立ち上げたいと『森信三訓言集』を準備され

久保田暁一先生を偲んで
徳丸 和枝

久保田暁一先生を偲んで

德丸
和枝

「志」、「不屈」、「謙虛」の人

田中
清行

久保田暁一先生が召天されましたことに哀悼の意を捧げます。

ました。その結果、何冊も
の本を出版され、その中に
は私が愛読している『中江
藤樹』もあります。

晩年には、病魔に侵されても凛としていらっしゃいました。先生は、周りの人

顔で、思いやりのある言葉をかけ、優しいまなざしで話に耳を傾け、思いやりの心で誰とでも接する（五事を正す）ことを体現されていた「謙虚」の人でした。

おりましたので、先生を車で長浜の童心塾へお連れした時にはたいそう喜んでくださいました。

私が平成二十三年に「藤樹人間学
習会」を立ち上げると、初回は久
保田先生と徳丸和枝さんと私の三人

久保田暁一先生を追悼して

久保田曉一先生を追悼して

渕田
京子

でした。はじめの三年間は『翁問答』をテキストに進めました。先生は皆出席して下さり、時々お考えを吐露していただきました。『翁問答』の次は『大学解』がよいのでは、というアドバイスをいただき、『大學解』を一年半かけて進めました。現在は「藤樹人間学塾」と改称して『孝經啓蒙』をテキストに毎月、人間学を学び続けております。

私が今日、塾長として道友と楽しく学んでいけるのも、久保田先生から折りにつけ、適切なアドバイスをいただき、慈愛のお心で見守つて下さい下さったお陰です。

久保田先生、本当にありがとうございました。先生が敬愛されていた中江藤樹の思想を私も微力ながら道友とともに顕彰し、少しでも地域のためになるよう精進してまいりますので、どうぞ天から見守つっていてください。

私が今日、塾長として道友と楽し
く学んでいけるのも、久保田先生か
ら折りにつけ、適切なアドバイスを
いただき、慈愛のお心で見守ってい
て下さったお陰です。

久保田先生、本当にありがとうございました。先生が敬愛されていた
中江藤樹の思想を私も微力ながら道
友とともに顕彰し、少しでも地域の
ためになるよう精進してまいります
ので、どうぞ天から見守っていてく
ださい。

中江藤樹の思想を私も微力ながら道友とともに顕彰し、少しでも地域のためになるよう精進してまいりますので、どうぞ天から見守っていてください。

久保田暁一先生を追悼して

渕田 京子

若かりし頃の先生は、授業に大変熱心であり、騒いでいる生徒にはすごい勢いで説教されていましたことを思

い出します。授業はストップし、教室には先生の大きな声が響き渡ります。

した。あの温和なやさしい顔つきからは、想像もできないほどでした。ひたむきに教育に打ち込み、担任として私たちの心の中に入り込んで、情熱を持つて指導していく姿には感服でした。「失敗を

そこで私は、「中江藤樹は、内省

的・静観的であり、良知を曇らせる人間の考え方や意識、つまり情欲を取り除くことを大切な修行の眼目にしています。一方、王陽明は、より行動的・積極的であり、自らが事に当たつて鍛錬することに重点を置いています。そのため、二人の『致良知』の読み方が異なります。』と答えました。このことは、久保田先生の『中江藤樹』の本の中に書かれていたため、説明することができたのです。

高校を卒業して二十年間は五年ごとに、三十年以降は毎年クラス会が開催されています。先生は教え子から近況報告を聞くのを楽しみに、毎年出席してくださいました。ここ数年は、先生のお体を次から次へと病魔が襲いましたが、持ち前の粘り強さで昨年まで元気な姿を見せてくださいました。ところが、今年のクラス会ではお顔が見えなかつたので、参加者全員、先生のお体を案じておりました。

ださつしていました。ところが、今年のクラス会ではお顔が見えなかつたので、参加者全員、先生のお体を察じておりました。

現在、私は藤樹書院で、全国各地



「高島玄俊」

石田敏

高島玄俊は、文政元年（一八一八）八月、近江国高島郡朽木庄宮前村（現、高島市朽木宮前坊）で師村甚七の次男として誕生し、当時の慣わしで、十四歳になると近隣の寺へ小僧に出されています。

シリーズ③ 「郷土高島の先人に学ぶ」

江戸時代には前後三十五回に及ぶ飢饉が記録されていますが、なかでも玄俊が寺へ入つた翌年、すなわち天保四年から同七年にかけて発生した「天保の大飢饉」は悲惨なものでした。『朽木の昔話伝説』によると、「村中は、どこにも食うものがなかつた。山野草も取りつくし、しまいには松の皮も食う有様やつた。それも無い者は稻木を削つて食べたり」と書かれており、別の史料には多数の餓死者が出たことが記録されています。



高島玄俊の生家跡に建つ顕彰碑

機として、医者になるために朽木を後にしたようです。十六歳で丸亀藩医河田玄叔のもとで漢方医を、京都の村田順道のもとでは古医方を、さらに山本永吉について儒医学を学んだといわれています。弘化元年（一八四四）、二十六歳になつていた玄俊は、さらに西洋の医学を学ぶために長崎へ向かいましたが、途中乗つていた船が伊予灘付近で難破したらしく、豊後国の府内（現、大分市）に漂着しました。その後三年間、玄俊の身上について知り得る資料が不足しているために理由は不明ですが、府内に留まる決心をして町医を開業しています。またこの頃妻を娶り、ほどなく長男が誕生しています。

府内での玄俊は、医療活動に大変熱心だったうえに、貧しい人からは治療代をとらないばかりか、金を与えることもたびたびであつたために、多くの人々からは慕われました。が、家計は常に火の車であつたといわれています。そして、開業から十年目には、玄俊の活躍ぶりが府内藩主の耳にも達し、藩の医事監格に任命されています。

なお、今日まで、玄俊が大分で高く評価されているのは、医者としての活躍のみではありません。貧民の生活を安定させるために、医業の収入や藩からの給米を資材の調達に当てて、新田の開発を行っています。

慶応二年（一八六六）に発生した飢饉の際には、病躯をおして立ち上がり、仲間とともに義援金を募つて、一万人の人々に救いの手を差しました。また、明治二年（一八六九）に百余戸を消失した市内の大火では、私財を投じて救援活動を行い、さらに、明治七年には大分県第一小学校の建設にも尽力しています。

しかし、永年の無理がたたつたため、玄俊の病状は二度と回復する

嘉永四年（一八五一）の秋、三十三になつた玄俊は、妻子を連れて朽木へ帰省しましたが、故郷朽木の地を踏むのはこれが最後となりました。

玄俊死去の訃報が伝わると、その死を心から惜しむ市民三千人が、葬儀の列を作りました。また、玄俊の没後、生活に困窮した高島家へは、毎年暮れになると玄俊に救われた人々から飯米が届けられたというこ

とです。

では、玄俊が身命を賭して行つた難民救済の原動力は、どこから生じたものでしょうか。天性として備わった道徳性やヒューマニズムとして片付けられるものではないように思われます。おそらく、少年の日に郷里で目にした天保飢饉の惨状が、その後の玄俊の人格形成や思想のうえに大きな影を落とさないではおかなかつたのではないかでしょうか。



